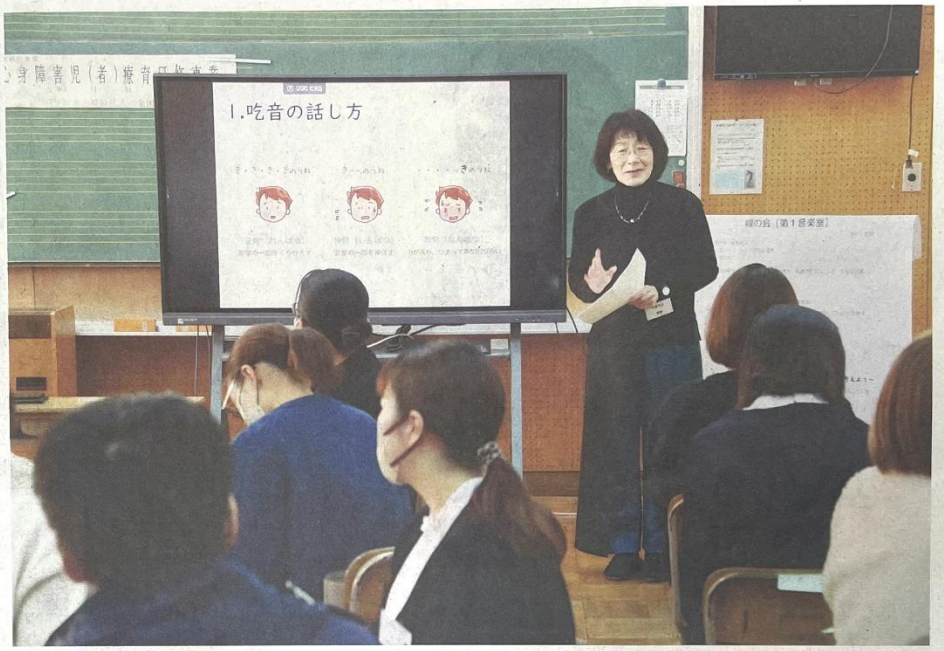
2024年（令和６年）12月６日　北信ローカル　11ページ

北信ローカル　第３種郵便物認可

理解深め、学び続けて

中野小で吃音学習会



大人向けに吃音について説明する内藤さん

県特別支援教育研究連盟難聴・言語障害教育部会の第1ブロックは1日、吃音（きつおん）学習会を中野小学校で開いた。吃音のある子どもたちを支える大人、児童が集える機会をと2011年から開かれているもので、大人の会には約40人、子どもの会には小中学生19人が参加し、理解を深めたり交流した。

吃音は、言いたいことが頭に浮かんでいるのに言葉がスムーズに出せない症状で、一般的に「どもる」とも言われる。子どもを支える大人の会には、第1ブロックの飯山、中野、須坂小学校に併設されている「ことばの教室」に吃音で通級する児童の保護者、吃音に関心を持つ教員、保育士、保健師、入学前相談に関わる教育委員会担当者らが参加。神應透析クリニック（松本市）の言語聴覚士の内藤麻子さんと、吃音の当事者の皆川裕己さんが講演した。

内藤さんは、吃音の話し方として「き、き、昨日ね」のように言葉の一部を繰り返す「連発」、「きーのうね」と言葉の一部を伸ばす「伸発」、力が入り詰まって声が出づらい「難発」があることを紹介。原因が緊張やストレスと考えがちだがまだ分からないこと、周囲の何気ない悪意のない疑問や助言が吃音のある子どもにとって指摘となってしまい、症状悪化につながってしまうことなども解説。支える大人も理解を深め、一緒に学び続けていくことの大切さを説いた。

皆川さんは、幼稚園に通う頃、誕生会で自分の誕生日がわかっているのに言えなかったことで吃音に気づいたといい、小学校に上がって以降も教科書の音読がうまくできず友達に真似をされたり、うまく話せないことを教師に明かしたが「同じようにできているから大丈夫」と言われて相談をやめてしまったこと、隠そうとするうちに症状が悪化したり、どもることを見せまいと授業の発言を「分からない」と答えることで評価が下がるなど、悩んできた経験を話した。

入試や就職試験の時の面接に恐怖心を抱いたり、人前での自己紹介や電話もかけたくないという本音を明かしながらも、「自分の話し方を受け入れ、自信を持って生きていくことを目標に実践している」と話し、「小さな頃から、吃音でどこでつまずくか説明できればいいし、困っていることを話せるようだと楽になれる。社会全体が吃音を理解してくれることが理想だが、まずは身近な支援者、理解者と解決できれば」と、周囲の理解を呼びかけた。

子どもの会は学年に応じて行われ、ゲームを通した交流、中学、高校生活に向けて一緒に考える時間が設けられたほか、小学5、6年生と中学生の交流では、小学生が授業や生活で心配に思っていることを質問し、中学生が自分の体験や考えを基に優しくアドバイスする場面もあった。